

仕事が楽しい人 F i l e . 1 7 : 富田 陽一さん (足場施工管理業)



◆ 建築に不可欠な足場



この写真の建物は、スペインのバルセロナにある、サグラダ・ファミリです。

サグラダ・ファミリアは、着工から100年以上が経過してもなお建築中で、完成は2026年を予定しているそうです。

世界には、人々を魅了する多くの建築物がありますが、あらゆる建物は、足場がなければ建てられません。

今回は、この建築にはなくてはならない足場の施工管理をしている、富田さんの仕事を取材しました。

富田さんに業務内容の概要を説明していただいた後に、

「足場を施工する上で重要なことは何ですか」と尋ねると、

「それは、安全です」と、間髪いれずに答えが返ってきました。

この答えは、ある意味、当然の内容なのですが、

足場の施工作業を思い浮かべてみると、

富田さんが「安全です」と力強く答えた意味合いを理解できます。

例えば、足場を組む長いパイプを上げた際に、
もしも、過って手を滑らせて落としてしまったら、大変な事故になります。
足場が組まれた後も、大工さんや塗装屋さんが、足場から落下する危険もつきまといま
す。

さらに、台風や地震などの自然災害に巻き込まれる危険もあります。

富田さんは、続けます。

「ですから私は、“心配をする”のが仕事だと心得ているんです」と。

具体的には、

「台風が接近しているとの天気予報を聞くと、全ての現場が頭に浮かびます」

「そして、各現場を回ったり、連絡をしたりして、異常がないかを確認します」

「大事故は、“このくらいは大丈夫だろう”との油断が原因で発生するのですから」

危険が伴い続ける仕事なので、いくら心配をしても、し過ぎることはないというわけ
です。

富田さんの話は、真剣で、その節々から、無事故を貫く覚悟が伝わってきます。

続けて話を聴くうちに、富田さんのこの覚悟の核心が見えてきました。

その覚悟とは。お施主さんの宝物を守る決意。

万が一ですが、もし、建築中に事故が起きてしまったら。

しかも、人命に関わるような、取り返しのつかない事故だったら。

事故を起こした本人、関係者、そして、家族は、一瞬にして、大変な災いに巻き込まれ
てしまいますが、それ以上に、お施主さんは、この災難を背負い込むことになります。

建物を建てるのは、施主にとって、一世一代の買い物。

まさに、念願の宝物を手に入れる、人生最良の出来事のはずが、

事故の発生により、最悪の記録が、建物に刻み込まれてしまいます。

そして、この縁起の悪い建物に、住み続けなければなりません。

富田さんは、この因果を理解しているからこそ、覚悟を持って、足場の施工管理をして
いるのでしょう。

「事故がなく無事に建築作業が終わる」

この当たり前を守ることの責任感が、

“心配をするのが仕事”という言葉に凝縮されているのです。

“足場”は、この作業の無事を見届けると、速やかに撤去されてしまいます。

その後、住人たちは、この建物を活用して、幸せな生活を送ります。

建物は、雨風にさらされ、それに耐えながら、住人を守り、

時の経過とともに傷みが蓄積し、リフォームの時期を迎えます。

この時に、“足場”は、再び登場します。

まるで、建物を労うように。

この営みを繰り返しながら、建物には、寿命をまっとうする日がやってきます。建物の最後を見届けるかのように、“足場”が組まれるのです。

このように、“足場”は、建物が生まれ、蘇えり、寿命をまっとうするという、節目ごとに登場しては姿を消すものなのです。

まさに、ドック（船の建造・修理などを行うために構築された設備）みたいな存在。

それが、“足場”なのです。

◆富田さんが大切にしているキーワード

一球入魂

全てのことに全力で取り組むのが、私の信条です。

◆富田さんのパワー○○

自分を必要としてくれること。

「富田さんお願い」と頼まれたら、どんなことでも、一球入魂したくなります。

◆平堀が感じ取った富田さんの信頼力

人は、そもそもミスをする生き物です。

ですから、人災と言われる事故が絶えず、悲しいニュースが繰り返し流れます。この絶対のない人間に、絶対安全な仕事をしてもらう。

それが、富田さんの仕事なのです。

そのために、富田さんは、職人さんとの関係づくりを特に重視しています。

施工作业を無事に終えた職人さんに労いの声をかけたり、

休日の日の過ごし方や、趣味について話題を向けたり、

とにかく、こまめに、職人さんと話をします。

これは、富田さんが、安全確保の前提に相互の信頼関係があると、

確信しての行動なのですが、

ヒューマンエラー（人為的過誤や失敗）が発生する要因と照らし合わせてみると、富田さんの考え方の正しさがはっきりします。

主な要因は、次の2つ。

“疲労蓄積”

“睡眠不足”

職人さんと直接接しなければ、これらの状態は把握できません。

従って、相互信頼を基にした、こまめなコミュニケーションが求められるのです。

ただし、こまめなコミュニケーションとは、しつこいくらいの安全確認。

下手をすると、うっとうしいと、嫌がられてしまう行為です。

なのに、何故、富田さんは、職人さんとの信頼関係を維持できているのか。

それは、次の発言から解明できました。

「平堀さん、足場を施工するって、芸術なんですよ」

どういう意味か確認すると

「建物の形は千差万別ですよ。それぞれ異なる形状に合わせて足場を組むのは、かなり難しいものなのです」

と、富田さんは、自慢気な表情で説明してくれました。

私は、マッチ棒を活用した図形パズルの問題が脳裏に浮かび、

何となくですが、その難しさがイメージできました。

富田さんが職人さんと関係を築く土台に、

職人さんへの大いなる“敬意”があったのです。

それが、“足場の施工は芸術なんですよ”の言葉に含まれていました。

◆富田さんのプロフィール

職業：足場施工管理業

所属：フクムラ仮設株式会社 (<http://www.fic-group.com/>)

◆足場施工ってどんな仕事？（鳶職として検索）

（13歳からのハローワーク公式サイトに掲載されている村上龍氏の解説を抜粋しました）

ビルの建設現場などの高いところで足場や鉄骨を組み立てたり、機械を取り付けたりする。高所での作業となるため、集中力とバランス感覚が大事であり、当然ながら高所恐怖症の人には向かない。危険と隣り合わせである反面、建設作業員のなかでも花形である。体力勝負の職業であるが、本人の努力次第で取得可能な資格もあり、スキルアップも図ることができる。近年、建設事業が少なくなっていることにもない仕事は減少気味であるものの、「建設は鳶にはじまり鳶に終わる」と言われるように、建設業界になくてはならない職業である。

◆足場施工管理者に求められる能力

心配力：安全に絶対はないと心得、細心の注意を払う力

粘着力：日々、同じことを繰り返し行える力

敬意力：人を敬える力。人の力を信じる力。人の流す汗を尊ぶ力

会話力：人と気兼ねなく話し、話を聴ける力